



下地中分線沿いの町並み

## 町並みについて

- ◆玉名市伊倉は同市の高瀬とともに16世紀頃まで海外貿易港として栄えた商人の町です。
- ◆かつて貿易船を繋いだといわれる「唐人舟つなぎの銀杏」や、一時ウィリアム・アダムス(三浦按針)を船長として雇用し、日明貿易を行った「肥後四位官郭公」の墓などが点在し、大陸文化への玄関口であった面影を残しています。
- ◆また、伊倉の商店街の道筋は“下地中分※1”の線と伝えられ、通りの東端には伊倉北八幡宮と伊倉南八幡宮が道を挟んで建っており、珍しい町並みとなっています。

※1下地中分…荘園公領制下の重層的に入り組んだ支配・権利関係の中で、それぞれの主体が一元的に土地を支配することを目的に行われた土地の分割を指し示す。



## 町並みの中心(核)となる伝統的建造物

### 益 伊倉北八幡宮・ 伊倉南八幡宮

- ◆両八幡宮は、伊倉北方と伊倉南方を分けるかつて下地中分線があった道路を挟んで並立しています。
- ◆和銅2年(709年)に勧請され、現在の建造物や石垣は加藤清正により再興されたといわれており、桃山風の華麗な彫刻が施された社殿や楼門は秀逸な構えをみせています。



伊倉北八幡宮・南八幡宮(左奥が北八幡宮)

周辺には豊かな水田が広がる現在の景観からは想像もできませんが、唐人舟つなぎの銀杏や切支丹墓碑、唐人町という地名から、かつて貿易港として栄えた同地区の繁栄をうかがうことができます。加藤清正の菊池川河口干拓事業により、港は埋め立てられ貿易拠点としての役割は終えましたが、この地から大陸へと向かう唐人船が有明海に繰り出す光景を今に残す町並みとなっています。